

金華山の鳥類相

伊沢紘生*・藤田裕子**

Avi-fauna in Kinkazan Island, Miyagi Prefecture

Kosei IZAWA and Hiroko FUJITA

要旨：子どもたちへの環境教育の一環として、多様性に富んだ自然の中での体験学習は欠かすことのできないものである。本研究は、全国各地で自然観察会の対象になっている野鳥について、金華山での継続調査の結果をまとめたものである。島では34科114種、うち陸鳥102種、水鳥12種が確認された。

キーワード：野鳥、金華山、SNC構想、自然観察会

1. はじめに

宮城教育大学環境教育実践研究センター（以下、EECと略称）では、平成9年度から8つのプロジェクト研究をスタートさせた（平成10年3月発行のEECパンフレットを参照）。その1つが「金華山でのSNC構想の推進」である。SNC構想（スーパーネイチャリングセンター構想）とはなにか、SNC構想推進のためになぜ金華山の自然が選ばれたかは、本紀要第1巻に詳述してあるのでここでは繰り返さないが（伊沢, 1998）、主たる目的を端的に言えば、多様性に富んだ自然のもつ教育力を、とくに幼児、児童、生徒を対象にした自然体験学習（子どもたちへの「環境教育」のもっとも大切な柱と位置づけられる）に十二分に活用する、そのためのモデル作りである。そこで重要なのが、自然のもつ教育力をつねに発掘しつつける努力であり、気象や地形、地質、水質、植物等あらゆる自然科学分野の基礎的調査とともに、とくに野生動物の生態調査の継続が欠かせない。

ところで、野鳥は、全国どこでも、公的ないし私的な研究・教育機関や各種団体が主催する自然観察会の主たる対象になっていることがきわめて多い。種ごとに異なる神秘的ともいえるメタリックな色彩が見る人を驚愕させ、種ごとに異なる繊細な鳴き声が聞く人を和ますからだろう。しかも、種ごとの1羽1羽は、感動的な時空の履歴と配置を背負った存在なのである。

筆者らは上記EECプロジェクトをスタートさせるにあたって、近年十分にはなされてこなかった島の鳥類相の継続調査を開始した。本報では、現在までの4年間の結果を中心にとりまとめを行う。

2. 金華山の鳥類相の研究小史

鳥類相の研究は、どの地域においても、アマチュア（在野の研究者）の手に委ねられている場合が多い。いわゆる学術研究にはなりにくい分野だからである。というのは、はるか遠くからのかすかな鳴き声の識別能力や、樹間や大空を一瞬にして通過するシルエットの識別能力など、野鳥に対する調査者の長い経験に裏打ちされた“職人芸”が大きくものをいう世界だからであり、それでもなお、その地域にごく短時間（1日とか数時間）しか滞留しない旅鳥や、上空を通過するだけの旅鳥、木々の葉のおい繁りに埋没してしまう夏鳥に、運良く巡り会えるかどうかといった偶然性や、もう少し長い時間の滞留でも、個体数がごく少ない場合、その鳥がその時いる場所にたまたま行き当たるかどうかといった偶然性など、調査者のたぐいまれな観察能力をもってしても、いかんともしがたい要素が大きいからである。

金華山の鳥類相の研究もその例外ではないし、島に生育する落葉広葉樹の優占樹種、ブナ、ケヤキ、イヌシデの実（種子）のなり具合に年変動が著しく（伊沢,

*宮城教育大学環境教育実践研究センター **宮城教育大学教育学部

2000)、それに合わせて秋から冬にかけての鳥類相が年ごとに様が変わりすといった点もある。これまでに金華山で行われた複数年におよぶ精度の高い調査は、大きく2つに分けることができる。あるいは2グループないし2人の調査者を中心とした調査に分けられる、といった方がいいかもしれない。

ひとつは、金華山に焦点を絞った竹丸勝朗を中心とする研究であり、もう1つは、金華山、網地島を含む南三陸沿岸地域一帯を対象にした田中完一を中心とする研究である。

前者は、1961年12月から7年間、計14回、延日数38日かけた佐藤和夫、水野伸彦、竹丸勝朗、松本勝彦の4名による調査(1968)と、その後さらに調査を継続させた竹丸の調査(1973)である。なお、彼ら4名のうち、佐藤と水野は仙台市及び郡山市在住の日本野鳥の会会員であり、竹丸と松本は仙台市及び埼玉県在住の上記会員及び日本鳥学会会員である(当時)。

後者は、志津川愛鳥会の創立者で会長の田中完一が、多くの仲間たちとともに、小学校教師で野生動物研究家の立花繁信から協力や助言を受けつつ、1953年から1982年まで行った調査(田中, 1982)である。なお、田中は志津川町の開業医で、日本野鳥の会会員でもある(当時)。

このほかにも、島の鳥類相について公表されているものはいくつかあるが(後述)、黒田・小笠原(1967)によるパイオニア的調査を除いてはすべて、上述した2つの調査成果、ないしはどちらかからの大幅な引用をベースにした報告であり、長期にわたって継続観察したオリジナルな報告はない。

3. 野鳥の類別

野鳥は、日本列島でどの季節に見られるかで、一般には留鳥、冬鳥、夏鳥、旅鳥、迷鳥に類別される。このうち留鳥を、留鳥と漂鳥にさらに分けることも多い(高野, 1997; 田中, 1982)。もう一方で、採食を中心とした生活様式の違いから、陸鳥と水鳥に、そして水鳥をさらに水鳥(淡水域を主に利用)と海鳥(海水域を主に利用)に分けることも多い(高野, 1997)。

ところで金華山は、牡鹿半島の先、太平洋上に浮かぶ島であり、面積は約10km²と小さく、最高点も海拔445mとけっして高くない。また、島と牡鹿半島との

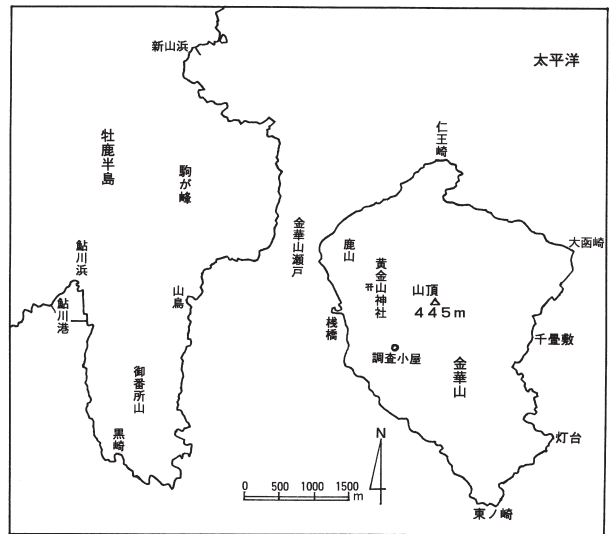


図1 金華山と牡鹿半島の概略図



図2 牡鹿半島から見た金華山の北西部

最短距離は約700mで、すべての鳥がごく簡単に行き来できる(図1、図2)。実際、その時どきの食物が半島部に豊富にあり島に少なければ、その種は島に飛来せずもっぱら半島部で過ごすし、その逆もまた真である。したがって、島の鳥類相を考える場合に、留鳥をさらに留鳥と漂鳥とに分けてもたいした意味はないだろう。

一方、金華山が周囲ぐるりを荒海に囲まれた島であることから、海上で、とくに秋から冬にかけて観察される海鳥を、どこまで金華山の鳥類相とするかは、どうしても人為的になり、区別が大変難しい。本報では、あくまで島での自然学習の教材という視点から、8倍ないし10倍程度の双眼鏡を使って島を歩いていて観察できる鳥類に限定し、船舶を利用したり、高倍率のプロミナを使用してしか定かに確認できない海鳥は除外することにした。すなわち、アビ科やカイツブリ科、ア

ホウドリ科、ミズナギドリ科、ウミツバメ科、ヒレアシシギ科、ウミスズメ科などの鳥たちはすべて除外し、磯で採食したり、東側の海岸に多い岩礁で休息したり、海岸絶壁で営巣するウ科やカモメ科、シギ科、ガンカモ科の一部の鳥たちは、島にいて双眼鏡での観察が十分に可能なことから、島の鳥類相に入れた。

4. 金華山の四季

ある鳥が一定期間ある地域で見られるとき、なぜそこで生活しているかは、外敵に襲われる危険性が少ないとか、外敵等との関係で営巣や育雛が安心してできるといったことも重要だが、第一義的には食物が十分保証されているからである。そして、鳥の食物は、とくに陸鳥の場合は、花の蜜、果実、種子等の植物と、昆虫を中心とした小動物（猛禽類は除く）である。

金華山では4月に入るとブナの花が咲く。カタクリの花が咲く。ハンゴンソウが一斉に赤い芽を出す。続いてケヤキやシデ類、カエデ類など落葉広葉樹が次々と芽吹いていく。ガマズミ、サンショウ、ウスユキハナヒリノキなどの灌木も芽吹く。森の色彩が日毎に変わる。それは劇的な変化である。風は概してやわらかく、東と西とから交互に吹く。この変化は5月一杯続く。島の春はツツジの花が散って終る。

6月に入ると、すべての樹々が葉をおい茂らせ、森は濃い緑一色に塗り潰される。やがてクリの淡黄の花とカマツカの白い花が咲く。梅雨が訪れ、霧が深く立ち込める日が増える。7月下旬からしばらくは太陽の照りつける暑い日が続く。島の夏である。

8月のお盆を過ぎると、風は急速に湿気を減じ、さわやかになる。ハンゴンソウの花が島の斜面を黄色く染める。ブナやクリ、ドングリなど落葉樹の実も熟れ始める。9月に入ると、ときに南東の風が強く吹き、磯には大きなうねりが押し寄せる。ガマズミやサンショウなどの灌木の実が次々に赤く色付く。樹々の葉は濃緑やつやを失い、色が変わって、10月には散り始める。そして11月中には、すべての落葉樹が葉や実を落し尽し、ワラビやハンゴンソウ、レモンエゴマなど下草はすべて茶色に枯れて倒れる。アキアカネの群舞が消え、そうして島の秋は終る。

身を刺す北風が連日吹きつけるようになるのは12月に入ってからである。風は落葉を舞い上げ、樹々の梢

を激しく鳴らす。やがて地面に霜が降り、空からは時折雪が舞う。沢の水が凍てつくこともある。森の寒々とした風景は3月下旬まで続く。島の冬である。

鳥たちは、おそらく島のこのような季節変化、すなわち食物の変化にあわせて、訪れたり、飛び去ったりしているはずである。したがって、ここでは、四季を暦上の区別によらず、島の自然の変化にあわせた形で、春を4月と5月の2ヶ月、夏を6月から8月前半までの2ヶ月半、秋を8月後半から11月までの3ヶ月半、冬を12月から3月までの4ヶ月とした。そうしないと、夏鳥とか冬鳥といった呼び方も、島で観察される実際にそぐわなくなるからである。

5. 島の鳥類相、この4年間の記録

筆者らは、金華山に生息する野生ニホンザルの生態調査や、さまざまな対象と形態の自然観察会のスタッフとして、年間を通して頻繁に島を訪れている。そして、いかなる目的での金華山滞在においても、野鳥の観察記録だけはとり続けた。表1と表2に、この4年間の筆者らの記録をまとめた。観察記録の季節区分は、前章で述べたように、鳥の餌となる植物の実や昆虫の島での年間変遷から、春を4月～5月、夏を6月～8月前半、秋を8月後半～11月、冬を12月～3月とした。また、両方の表に、1985年からそれまでの、筆者らの1人伊沢が行った鳥類調査のうち、この4年間では一度も観察できなかったものを、独立した欄をもうけて加えた。

両者を合計すると、金華山の鳥類相（ドバトを含む）は、30科100種、そのうち陸鳥は88種、水鳥は12種である。また、この4年間だけでは29科97種、うち陸鳥85種、水鳥12種になる。

ただ、筆者らは金華山滞在ごとに、いつも全島を限なく歩いて野鳥を観察しているわけではない。サルで調査対象にしているのは主に島の南部に行動圏をもつD群である。調査基地として借用している宮城北部森林管理署金華山造林宿舎（通称：調査小屋）も島の中央より少し南に寄ってある（図1参照）。したがって多くの場合、島の南半分まで調査していることになる。

一方、島の北半分、とくに神社のある北西部一帯は（図1と図2参照）、島の中では特殊な植生をしている。どう特殊かという、①神社の後背地を中心にカヤの

表1 金華山の野鳥リスト(陸鳥)※

鳥の種名(和名)	季節				Iz	O・N	鳥の種名(和名)	季節				Iz	O・N
	春	夏	秋	冬				春	夏	秋	冬		
ミサゴ	○		○	○		○	マミジロ					△	
トビ	○	○	○	○		○	トラツグミ	○		○	○		○
オジロワシ			○	○		○	クロツグミ			○			○
オオワシ			○	○		○	アカハラ	○		○	○		○
オオタカ				△		○	シロハラ	○		○	○		○
ツミ	△					△	マミチャジナイ			○			△
ハイタカ	○						ツグミ	○		○	○		○
ノスリ	○		○	○		○	ヤブサメ	○	○	○			○
サシバ	△					○	ウグイス	○	○	○	○		○
チュウヒ			△				メボソムシクイ						○
ハヤブサ	○	○	○	○		○	エゾムシクイ						○
ヤマドリ	○	○	○	○		○	センダイムシクイ	○	○				○
クイナ						○	クイタダキ	○	○	○	○		○
ヤマシギ			○	○			キビタキ	○	○	○			○
アオシギ			○				オオルリ	○	○				○
キジバト	○	○	○	○		○	エゾビタキ			△			
アオバト		○				○	コサメビタキ	○		○			○
ドバト	○	○	○	○		○	サンコウチョウ		○				○
カッコウ	○	○				○	エナガ	○	○	○	○		○
ツツドリ	○	○				○	コガラ	○	○	○	○		○
ホトトギス	○	○				○	ヒガラ	○	○	○	○		○
オオコノハズク						△	ヤマガラ	○	○	○	○		○
フクロウ	○	○		○		○	シジュウカラ	○	○	○	○		○
ヨタカ	○	○				○	ゴジュウカラ	○		○			○
ヒメアマツバメ						△	メジロ	○	○	○	○		○
アマツバメ						○	ホオジロ	○	○	○	○		○
アカショウビン						△	ホオアカ						△
カワセミ						△	カシラダカ	○		○	○		○
ヤツガシラ						△	ミヤマホオジロ			○			○
アオゲラ	○	○	○	○		○	ノジコ	○	○				○
アカゲラ	○	○	○	○		○	アオジ	○	○	○	○		○
オオアカゲラ			○				クロジ	○		○			○
コゲラ	○	○	○	○		○	アトリ			○	○		○
ツバメ	○	○	○			○	カワラヒワ	○	○	○	○		○
イワツバメ	○	○					マヒワ			○	○		○
キセキレイ			○			○	ベニヒワ						△
ハクセキレイ	○	○	○	○		○	ハギマシコ			○	○		○
セグロセキレイ	○		○			○	イスカ			○	○		△
ビンズイ				△		△	ベニマシコ						○
タヒバリ						○	ウソ			○			○
サンショウクイ	○	○	○			○	コイカル						○
ヒヨドリ	○	○	○	○		○	イカル			○			○
モズ	○		○	○		○	シメ	○		○			○
キレンジャク			○			○	スズメ	○	○	○	○		○
ミソサザイ	○		○	○		○	コムクドリ	○					○
カヤクグリ						○	ムクドリ	○	○				○
コマドリ	○					△	カケス	○		○	○		○
ノゴマ			△			○	カササギ						△
ルリビタキ			○	○		○	ホシガラス			○	○		△
ジョウビタキ			○	○		○	ハシボソガラス	○	○	○	○		○
イソヒヨドリ	○	○	○	○		○	ハシブトガラス	○	○	○	○		○

表2 金華山の野鳥リスト(水鳥)

鳥の種名(和名)	季節				Iz	0・N
	春	夏	秋	冬		
ウミウ	○	○	○	○		○
ヒメウ	○			○		
カルガモ	○					
シノリガモ				○		△
キアシシギ			○			
イソシギ	○					
ユリカモメ	△					
セグロカモメ			○	○		○
オオセグロカモメ	○	○	○	○		○
シロカモメ			○	○		
カモメ			○	○		
ウミネコ	○	○	○	○		○

註. すべて表1に準じている。

大木が他地域にくらべ極端に目立つ。②ソメイヨシノ、シダレザクラ、ヤエザクラなど品種改良されたサクラ類や、フジ、ツバキ、カキ、ネズミモチ、スモモなど、島の他地域にはない樹木がたくさん植樹されている(伊沢・小室, 1993)。③神社のすぐ北側には、植えられたと思われる常緑のシキミの木の大きなパッチ(シキミ林)があり、林床は日が差さず一年中うす暗い。④その先には鹿山と呼ばれる広々としたシバ草原が広がっている。⑤しかもそこは、牡鹿半島に最も近い(図1参照)。⑥餌づけの影響で神社から鹿山にかけての1帯にはシカがきわめて高密度に生息し、シカによる植生の改変が著しい。⑦シカの食害を防ぐ大小さまざまな防鹿柵が設置されていて、その中は、柵ごとに特異な植生をしている。⑧神社のほかにもさまざまな建造物がある。このようなことと関係しているはずだが、島に飛来しても神社をとりまくこの1帯に留まる鳥がいる。

ところで、調査小屋をベースに、金華山で継続調査を行っているグループには、筆者らサル・グループのほかに、シカを専門に何年にもわたって研究しているシカ・グループがある。彼らが主に調査対象としているのは、たくさんいて、しかも人慣れした神社から鹿山にかけてのシカである。このシカ・グループの主要メンバーである星野リゾート・ピッキオの大西信正と西塚大幸は、毎年5月～6月の2ヶ月近く(シカの出産

期)と、9月～11月の2ヶ月以上(シカの交尾期)島に滞在して調査を継続しているが、野鳥にも精通している。筆者らは、島の南半分に片寄り気味の調査結果を補う意味で、彼らの観察した鳥類のリスト作成を依頼したが、心よく承諾してくれた。先の表1と表2の右欄に示したのが、両調査員の好意で掲載許可を受けたこの6年間の鳥類リストである。それを筆者らの結果と比較すると、ヒメアマツバメ、アカショウビン、ヤツガシラ、タヒバリ、ホオアカ、ベニヒワ、コイカル、カササギ、クイナなどが神社のある1帯に思いがけなく飛来していることがわかる。なお、ヤツガシラはサル調査員によって対岸の半島部、鹿山のほぼ正面にあたる所で一度観察されている(石川俊樹, 私信)。

この大西・西塚の記録を加えると、金華山の鳥類相は34科114種、そのうち陸鳥102種、水鳥12種になる。

6. これまでに公表された島の鳥類相

鳥類相の研究史の概略は2章で述べたが、公表されている研究成果のうち主なものは以下の通りである(発表年代順)。

黒田・小笠原(1967)は、加藤陸奥雄を代表者とする文部省科学研究費特定研究「生物圏の動態」の一環として、島の鳥類相を調査した。調査期間は1966年3月(3日間)、5月(1日)、8月(9日)、10月(4日)、11～12月(5日)である。そして54種を直接観察し記載した(海上で観察した鳥類は3章で述べた通り、ここでは除外する。以下の文献についてもすべて同様の取り扱いをする)。そのうち陸鳥は51種、水鳥は3種である(表3、表4)。なお、8月の調査は山階鳥類研究所の黒田と東北大学・大学院生の小笠原が行い(身分はいずれも当時)、残りの調査はすべて小笠原が単独で行っている。

佐藤・水野・竹丸・松本(1968)は、1961年12月から7年間、主として冬期と春期に、1回2～3日で計14回38日間調査した。そして92種を直接観察し記載した。

立花(1969)は主に上記2つの文献を整理した。竹

※表1の註

註1. 種名の配列は高野(1997)の野鳥チェックリストに依った。

註2. 季節は春:4～5月、夏:6～8月前半、秋:8月後半～11月、冬:12～3月とした。

註3. この欄の△印は1～2回しか観察されなかったことを示す。

註4. Izは伊沢が行った1985～1995年の調査では観察されたが、この4年間には観察されなかったものを示す。

註5. 0・Nは大西・西塚が観察した6年間のリストである。1～2回のものには△印を付した。

表3 過去の野鳥リスト（陸鳥）

鳥の種名（和名）	A	B	C	鳥の種名（和名）	A	B	C
ミサゴ		○	○	クロツグミ	○	○	○
トビ	○	○	○	アカハラ		○	○
オジロワシ		○	○	マミチャジナイ		△	△
オオワシ		○	△	ツグミ	○	○	○
オオタカ		○	△	ヤブサメ		△	○
ハイタカ		△	▲	ウグイス	○	○	○
ノスリ	○	○	○	メボソムシクイ	△		
サシバ		△	△	エゾムシクイ		△	△
イヌワシ		○	△	センダイムシクイ	○	○	○
ハヤブサ		○	○	キクイタダキ	○	○	○
チゴハヤブサ		△		キビタキ	○	○	○
ヤマドリ		△		オオルリ	○	○	○
キジバト	○	○	○	コサメビタキ	○	△	
ジュウイチ			▲	サンコウチョウ	○	○	▲
カッコウ			○	エナガ	○	○	○
ツツドリ	○	○	△	コガラ	○	○	
ホトトギス			▲	ヒガラ	○	○	○
オオコノハズク		△	△	ヤマガラ	○	○	○
フクロウ	○	○		シジュウカラ	○	○	○
ヨタカ	○	△	△	ゴジュウカラ	○	○	
アマツバメ	○	○	○	メジロ	○	○	○
アオゲラ	○	○	○	ホオジロ		○	○
アカゲラ	○	○	○	カシラダカ	○	○	○
オオアカゲラ		○	○	ミヤマホオジロ	○		
コゲラ	○	○	○	ノジコ			△
ツバメ		○	○	アオジ	○	○	
イワツバメ	○	○	○	クロジ		△	△
キセキレイ	○	○	○	アトリ		○	○
ハクセキレイ	○	○	○	カワラヒワ	○	○	○
セグロセキレイ	○	○	○	マヒワ		○	○
ビンズイ		○	△	ハギマンコ		○	
サンショウクイ	○	○	○	イスカ		○	○
ヒヨドリ	○	○	○	ベニマンコ		△	○
チゴモズ	○	△	△	ウソ		○	
モズ	○	○	○	イカル		○	
キレンジャク		△	△	シメ	○	○	
ミソサザイ	○	○	○	スズメ	○	○	○
カヤクグリ	△	○	△	コムクドリ	△	△	△
ノゴマ	△			ムクドリ		○	○
ルリビタキ		○	○	カケス	○	○	○
ジョウビタキ	○	○	○	ホシガラス		○	△
イソヒヨドリ	○	○	○	ハシボソガラス	○	○	○
トラツグミ	△	○		ハシブトガラス	○	○	○

註1. 種名の配列は高野（1997）の野鳥チェックリストに依った。
 註2. A欄は黒田・小笠原（1967）の報告による。そのうち△印は1回しか観察されなかったものを示す。
 B欄は竹丸（1973）の報告による。そのうち△印は佐藤ら（1968）が希としているものを示す。
 C欄は田中（1982）の報告による。そのうち△印は1～2回しか観察されなかった珍しいもの、▲印は直接観察はしていないが、周囲での観察から鳥に在る可能性のあるものを示す。

表4 過去の野鳥リスト(水鳥)

鳥の種名(和名)	A	B	C
ウミウ	○	○	○
ヒメウ	○	○	○
カルガモ		○	○
クロガモ		○	○
ビロードキンクロ		△	○
シノリガモ		○	○
キアシシギ		△	△
イソシギ		○	
ユリカモメ		△	○
セグロカモメ		○	○
オオセグロカモメ		○	○
ワシカモメ		△	○
シロカモメ		○	○
カモメ		○	○
ウミネコ	○	○	○
ミツユビカモメ		○	○

註. すべて表3に準じている。

丸(1973)は、先に述べた1967年までの調査(佐藤ら、1968)とそれ以降の彼自身の調査、および過去の観察報告等を整理して、島の鳥類として計95種、うち陸鳥79種(書き忘れのヤブサメを追加した)、水鳥16種をリストアップした(表3、表4)。

田中(1982)は彼が主宰する志津川愛鳥会の観察や竹丸(1973)を中心とした過去の記録をかなり丹念に点検・整理し、島の鳥類相として、確認されたもの陸鳥67種、水鳥15種の計82種、生息する可能性があるものとして陸鳥4種をあげた(表3、表4)。また、種ごとにどの月に見られたかも併記してある。

その後、立花(1992)は、かつての自らの報告(1969)と、1990年6月28・29日(2日間)に行った調査、および竹丸(1973)、田中(1982)ほかの文献を整理して島の鳥類相を、小野泰正(1992)は、竹丸(1973)と黒田・小笠原(1967)らの文献の上に自ら行った1990年6月28・29日(2日間)の観察を含め、島の鳥類相を公表した。

表3と表4は、黒田ら(1967)、竹丸(1973)、田中(1982)による金華山の鳥類相を一覧表にしたものである。これら3つの文献には載っておらず、立花(1992)ないし小野(1992)に載っている鳥類は、立花のカワセミ(後述)を除いてほかにはない。

また、ここまで引用したすべての文献を整理してみると、より最近の報告ほど種類数が増えているが、

それは、より古い報告を順次引用していくわけだから当然のことといえる。そして、報告ごとに多少の違いがあるのは、おもに過去の文献をどこまでチェックしたかによる。たとえば、立花(1992)のリストにのみあるカワセミは、筆者の一人伊沢(1989)が雑誌「野鳥」に書いたエッセイからの引用であり、小野(1992)のリストにはカワセミはない、といったことである。

しかし、一方で、ある調査者が見たと記録すれば、標本や写真資料でも残されていれば別だが、それをあとから確かめる術は全くないわけで、数多く文献を引用すればいいというわけにもいかない難しさがそこにはある。

7. 過去の研究との比較

表1と表3の陸鳥を比較すると、これまでの鳥類相の報告の中にはなく、筆者らと大西・西塚が新たに島で観察した鳥は、前述のカワセミを除くと、チュウヒ、ツミ、アオバト、ホトトギス、ヒメアマツバメ、アカショウビン、ヤツガシラ、タヒバリ、コマドリ、マミジロ、シロハラ、エゾビタキ、ホオアカ、ベニヒワ、コイカル、カササギ、クイナ、アオシギ、ヤマシギの19種である(ドバトは削除した)。このうち、それほどには珍しくない鳥は、アオバト、ホトトギス、コマドリ、シロハラ、ヤマシギである。なお、ホトトギスは田中(1982)が可能性のある鳥としてあげている。

一方、表3にあつて表1にない鳥はイヌワシ、チゴハヤブサ、チゴモズである。そのうちイヌワシは、牡鹿半島ないし北上山系からたまたま飛来したのが目撃されたはずであり、おそらく最後の記録は小野(1992)による1990年6月28・29日の調査での観察だろう。以後は記録がなく、今後も島で観察されることはないと思われる。チゴモズは南三陸一帯でもきわめて珍しい鳥だという(田中, 1982)。

なお、ヒレンジャクは表1になく表3にもないが、1999年11月に尾羽が拾われているし(川田仁和, 私信)、2000年4月には鹿山で1羽が直接観察されている(高橋修, 私信)。

謝 辞

本論文をまとめるにあたっては、星野リゾート・ピッキオの大西信正氏と西塚大幸氏からじつに貴重な

資料の提供を受けた。宮城野野生動物研究会の高橋修氏と宮城のサル調査会の石川俊樹氏、川田仁和氏からも資料の提供を受けた。宮城教育大学の溝田浩二氏と宇野壮春氏には文献収集に際して多大な協力を得た。宮城北部森林管理署石巻事務所からは金華山造林舎の使用許可を受けた。謹んで謝意を表する次第である。

引用文献

- 伊沢紘生，1989. ひとつの自然に親しむ喜び．野鳥，54(8)：8.
- 伊沢紘生，1998. EECプロジェクト研究・金華山でのSNC構想の推進・目的と活動報告．宮城教育大学環境教育研究紀要，1：57-52.
- 伊沢紘生，2000. 金華山のニホンザルの生態学的研究—個体数の変動・1995～2000—．宮城教育大学紀要，35：329-337.
- 小野泰正，1992. 南三陸金華山国定公園地域の動物．南三陸金華山国定公園学術調査報告書：pp.317-388.
- 黒田長久・小笠原暁，1967. 1996年宮城県金華山島で行った鳥類調査目録．昭和41年度文部省科学研究費特定研究・各種陸上生態系における二次生産構造の比較研究（加藤陸奥雄編）：pp.180-183.
- 佐藤和夫・水野仲彦・竹丸勝朗・松本勝彦，1968. 金華山の鳥類．鳥，18(85)：56-78.
- 高野伸二，1997. フィールドガイド 日本の野鳥（増補版）．日本野鳥の会．342 pp.
- 竹丸勝朗，1973. 金華山の鳥類．南三陸海岸自然公園学術調査報告：pp.45-46.
- 立花信繁，1969. 金華山の哺乳類と鳥類について．宮城県の生物：pp.149-158.
- 立花信繁，1992. 南三陸金華山国定公園の動物．南三陸金華山国定公園学術調査報告書：pp.389-437.
- 田中完一，1982. 野鳥は空に花は野に—南三陸野鳥観察—．志津川愛鳥会，407 pp.